橘南谿先生著

東遊記

前篇

皇都諸名家畫入

此書ハ橘先生醫学修行のため日本漫遊の時諸國の名所古跡奇談珍説を書集めし實録にして其中にハおのつから忠孝の教をふくミ人に益ある書なれバ今乃刻本となし廣く世にあらはしけるものなり

[illegible]村治右衛門[illegible]発兌之記

諸國奇談

東遊記 一

特別
ル3
3983
1

凡例

一 予醫学修行の為に漫遊する事前後合せて十年東西南北到らざる所なし然るに此書只東西を記したるものハ京城日本乃中央として二つに分ちて東西とし南北ハ其中に入れたるもの也

一 予が漫遊ハ医学の為なれバ醫事に心を用ゆることハ雑談といへども別に記録して同志の人にも示すべし此書ハ旅中見聞せる事を筆のついでにしるせる上のまゝに語る事乃虚実は正さず只話のまゝしるせる

こすも多くのるべし見る人其杜撰をとがむることなかれ
一段書中にしるせる事其実くはしくらひ考ふるに
とも多くもあるべし此書中には愚按を加へ臆識
論取捨は見る人の心にあるべし

南谿誌

東遊記目録

一之巻

○鎌倉　○竹根化蟬

○十府之里　○吹浦砂積 圓山應瑞画

○蘇武社　○埋木

○熊突 山口素絢画　○言葉石

○甲冑堂

二之巻

○松前津波　○寒氣落指

○小杉之感 南嶽画
○名立山明
○米山
○九十九橋 福居竹堂画
○塩竃

三之巻

○文武之餘風
○正木劔術 長澤蘆雪画
○丹後之人
○奉之神
○蜃氣樓 吉村蘭洲画
○侁渡之渡

四之巻

○親不知
○義經之笈

（蔵書印）

東遊記巻之一

鎌倉

橘南谿子著

鎌倉ハ東武通行の人の見る所にして路くしかり殊に又めづらしく其地に於て人ハ昔の儘山川町々ハ神社佛閣に於て懐古の情に一たび先鶴岡の八幡宮に詣づ其壮麗男山にもまさりて佛寺ハ建長寺最大刹なり鶴岡南面のきざはしを登れバ大なるいてふの木あり昔此宮の別当公暁将軍實朝公を弑戮しける所なりと云八幡宮の正

面通一の鳥居二の鳥居三の鳥居あり其鳥居の筋を
真直に下れバ由井が濱に出る也一の鳥居より由井が
濱までハ十八町なりとぞ鎌倉ハ皆山にして北面に
狭し谷々の間に屋鋪の残り少く一位尼せしと
又の其跡に比企が谷大御堂が谷扇が谷なとといふ谷々の
名高し頼朝公の屋舗跡ハ八幡宮の東の方にあ
り此地も少し平坦なれど三四丁にあまる所を大蔵
谷といひ傳へて知る也屋鋪跡の少し上の方
に頼朝公の塚あり人々の薩摩侯の寄附の大なる石

の手水鉢あり其向ひの東の方に薩摩侯の先祖の
墓所もあり此あたりを薩州より寄附せし物所々
有りとぞ此ほとり法華堂もありしよし聞えて鎌倉の人々
が住居せし八幡宮の東の方に滑川とて細き流れ
あり青砥左衛門が錢を落せし川なりとふみの事も
郭外の田の中に見えしが今ハ八幡世の如く町家なるハ六つ
しるしや義経の腰越も鎌倉より西に當りて大津浜
も有しと聞て此所を尋しが僅に古寺ありて見るべし
云ふ此所ハ名高くなし八町の在中なるべし背を向

事も微くかゝるまて鎌倉といへども今は四五万石の
大名の城下程も無き事と思ふる人鎌倉を高山も
なく大河もなく要害の地ともいふべからず只小さき山数
四方に連りて波濤のごとし其間の谷々も至て狭く
崎嶇たる平地を絶てなし但源氏にゆゑある地なれ
まて鎌倉の郡をあひしるや伊豫守頼義朝臣
陣に住じ安倍の貞任征伐の為に東国下向の時石清水
八幡宮を此地に勧請し給ふ其後コ相模守に任じ鎌
倉に下向ありて此所にて義家出生し給ふとかやかく

先祖由来のある地ゆゑなるべし鎌倉と名付し初は昔
大織冠鎌足公鹿嶋へ参詣の時此地なる由井の濱に宿り
給ひける夜霊夢によつて秘蔵し給ひし鎌を當所
大蔵山なる松岡に埋させ給ふゆゑに鎌倉といふ又大
蔵山なる鎌倉山とも名付しと其外神社仏閣甚多
く古跡旧跡種々に名ある所なりとて並べてあげたる
まゝにて候あり今度余も二三日も四五日も逗留して所々
を廻り寺社の旧記などをも一見せば面白き事も多かる
べきに只戸塚より入りて其日鎌倉は草々にて

一見し過るに、誰一人も知るもの一箇もなく又殘
れるもの甚多し

竹根化蝉

越前府中の南二里ほどに粟田部といふ所の田舎に
ある所作りまして此辺までの縁ある里は古昔継體
天皇大跡部皇子にておはせし時此所に御座
ありし故地名を大跡部といひしを後世誤りて
いひ誤りたるよしなり此所に粟生寺といふ寺あり天台
宗にて坂本西教寺の末寺なり頗る古き地の仏寺の

住持ハ余が方外の親友也此住持も本ハ浪々
せられ前年此寺に住しけるに此仏寺の小庭にある藪
破壊ありしに竹の根ことごとく蝉に変化
して既に生気備り動揺して早く地上に
出たるもありいまだ半ハ竹にして半蝉に変じ
たるもあり色々の形有りて其数百ばかりに及べる物
ハ小僧奴僕なども珍しがりあまりの多き故
後にハ珍らしげもなく住持ハ其数を害せん
とて憐みて又土に埋み蝉に化せしめんとせしと

うや瑞しき小なる六角にして二ツ三ツと求めて
携へ帰りし其中に背中より竹生ひ出るもあり
こは土に埋りて久しく経るに草の根より虫の変ずる也と
多くきこえの竹の節に変ずるもあるならむ
松前には冬は虫にて夏は草になるものあり冬虫夏草といふ
これを見れバ是等の事も亦疑ひなきやおもんぱかれバ
まことに無情の物有情に変じ又有情の無情に
変ずるも学理乃外なる事にて竹の事変じがたく
魚となるもの多かりしとあり又近江の人の語り

しは長浜にて山の芋を堀来り料理せるに中に鰻有
のありしとてその堀りし所は青き湖水に傍なりし
所といへバ山薯蕷は鰻の変じける事疑ひなし
といひ毛頭の人を自ら実の人かありしとぞあ
らじや

十府の里

十府の里といふハ菅ごも出せし所にして奥州の名
所なり仙台の北の方一二里の所に今もあり
又玉田横野宮城川をこえの橋多賀城壺の石ぶみ塩

竈の浦塩竈の玉川末の松山など名高き所名所二三
里の間に集まりぬれども此月八日程なく仙台を出て
東照寺といふ所へ出夫より塩竈明神へ出て塩竈
通行人に語るに新しげなりしのミ名に塩竈明神村にても
酒食の店も多く家居もよく賑ふる店にても
ける女どもの豆腐ハ甚だ見事なる湯豆腐もかくよし
奥へ入らせ給へといふまゝに座敷に通り次の間ハ寝所
の里のすなるといへども豆腐ハ浄瑠璃にも見えしぞ
先入らせ給へとはくすのしる蓋数々て敷盃て椀

もあり又仙台の城下にて古き瓦の跡の古瓦を此所に掘り出す
づく此十府の浦と限らず何方にても所々の人々名所なと
跡を尋ぬるによく知りて語りこれを人に教ふる事能く心得
けるよし故に尋求むる名所あれバ尋ねしりて其地へ至る
此ミ何方をも尋ねしるハ東の壺の石ぶみなどハ壺碑とは何ぞや
も筆まめやかに書付ける書物抔あるハ世の好人の大かる
ちのしるし此国なとの名所も多くきたれバ手集する者
なしといふ世をいとひて跡を残しに仙台の家中に観跡
聞老志といへる書物の巻数十余年をも餘りて奥羽

此國の名所古跡古事等を尋ぬるに委しく書出し
書たる作者は仙臺の人にて佐久間洞巌とて享保
時分の人也名は義和字を子厳大白山人と号す但
遠からぬ頃の知音也其子は今に仙臺の儒官にて姓を新井
と改め寿四郎と称す名は義質字を子敬滄洲
と号し齢既に七十年に近し右の古写本なるが洞巌彼方
に書多くのうちに他郡の古き書の名をも知れる人に
しても仙臺の士奥田正助といふ人の家にて一見した
り主人いへるは是も家の白石先生書かれし一部

書写して深く秘しおくといふ其外しかるに彼十府
の里もとふらひゆくゆく浅田村と塩竈との間にて街道
よりおほく入る所にて甚古跡あり菅薦も今は名のみ残
れり

吹浦砂磧

三月六二日出羽國酒田を發して起きいで吹浦といふ
里まで行くしかくこの間六里ばかり路傍に人家なく
又田畑もなく左は大海右は鳥海山にて見る所は渺々
たる沙場なれば道路もさだかならず往来の人も

迷ふ所なれバ長さ三五十間程づゝに杭を建て道の
目印とせり酒田より一二里も来ぬらんと思ふ頃
小風漸く吹起り沙の飛散る事おびたゞし初の
程ハ旅路をたどりしが又ハ人馬の足跡ある所ハ
草鞋馬沓なんどのある方へ道をいそぎしが次第に
風吹はげしく沙を吹起して天地も真黒に成り
目当の柱も見えざるのみか我うしろに従ひ来る奴僕
さへ見えわかねば只互に聲を合せ手を携へて行程
後にハ前後をもわかぬ程のことなれバ路を見ん

人も無く空もたゞひろく〳〵と、はるかにまで続く
思ふにかくみざる所迷ひあらバいかなる方へか迷ひ行く
んもえうとごとし将又ハ如何にして此所に安居
ていつまでかなからも風波の荒きをまで拙き小我
知らしめていつはりなき事又思ふくまるうち秋
なるへきがハいてさんとおもひしがさハ如何なる事ぞと
やせんかしくやあらんとまで思ひ居るに年ある比
より小雨降出し雨吹き来り降りものすさまじく京都程
もえ出ら嬉しく思ひ限りなく無しさまよひて風雅や

すさまじくハ空も何方へか吹散りぬ西ハ横海に立つ会
ねハ鄙より上にて葉より暮方あらそひぬれて出づ
くはしき事ハひもはつざるべからずされど海辺の雨
又しも迷ひ路も迷ひ只急ぎにいそぐ程に申の刻
ぞの吹浦へ至る迄此所に隠すす越後出羽
の三ヶ国ハ街道北海にかゝりて百四七十里が間ハ一里も
海辺を離るゝ事なし少しにても風吹時ハ常に海
に埋もるゝ事もあり只退く事ありて道を迷ふ
秋の末ハしよりしもおもひなしたり九月の頃より

三月末まで五日としてハ風吹ざることなく沙塵常に
天を覆ふ。唐詩にいへる北風動地といふ景気なら
ん。其吹ちらす沙風の吹廻しよりて所々に吹たまり
或ハ堆りて塚のごとく日々に其形変ず。天も北地乃
草木も皆秋の末より春の末まで青き葉ハなく
海ハなる砂漠に白草は風に動く。体この塞外沙漠
のさま作りたる詩にいひ来りしも遠からず。北に北極地
出ゝ四十度にあまりて塞北の地に似たりしと行ハ
一ある風気の土地とも似たりしと日本のうち

にかゝる所あるべし。其寒さも又是にしたがふ。昔より北地に於ハ
人ミな皆夏むかふけれハ草木も青く満ち風も南風
に起る。海ハ凍るもの、冬に至れバ恐ろしき程名も知ざる
事と半我北地に至りしハ九月より三月の頃なれ
ハ途中にて旅人に絶て逢ふ事なかりし。春旅行の
医術修行なりしかバ格別の事。然らずバ其の
探りもの出ん人ハ四月頃後に行べきなり也

蘇武社

出羽国秋田の城下より北東に海中へさし出たる地あ

つまびらかに望見ハ得ざりし是を男鹿山といふ櫻の住
吉の浦より陸路筏舟にまかりし此地ハ同じ出羽國
なれども格別の地にして種々の産物も多く出る中に材木
の内秋文杉の木多く世上に秋田杉といふハ此山より
出るといふ風景も殊に美しく其浦に蔦雀の岩
屋など奇ハ世上の人も知る所なり此男鹿山の中に
赤神山といふあり此山上に祭る所の神五座内一つハ
漢の武帝と云ひ一つは蘇武をまつる外の三社ハ我邦
の神なりと云此地の海向ひハ匈奴の地にして蘇武が牧

羊ハ此男鹿山と云いつの頃よりいひ伝ることにや
しかれども疑しき理なく附会せし説なるべし此辺
の風土気候いかなる蘇武が牢もさもありなんと
いふべきにや思ひける夏の頃なれ秋田湊の人
舩にあないして廻りて此山乃麓をすぐる色々
の奇境を探ることもあれども残りなくは
風波あればなり難き所なり又庄内と秋田領
の境にも女鹿といふ所をとめつ男鹿と相対して
居る事二三十里なり男鹿女鹿といふことも実にや

あるとしの夏彼地の人に誘はれて此男鹿山の
内にて第一の奇境といふは蝙蝠の岩屋なり
山の根海面に向ひたる所に洞あり八月の頃は潮
干る頃波なく見合せ行ば潮洞穴に及ばざる時は
絶壁のそとよりめぐりて潮高く此洞に及ぶ時小舟にて
よりて暫して洞穴の中へ漕ぎ入るまでは干あらし
て自然と洞の中に曲りたる潮にて潮浅く
あり高さ十間ばかりありて行奥深く
入るに次第に洞穴広く細かなる砂清らかにして

て後には潮も高ければ陸地と成り道も有とそれ
は天地の外にして遠山連れる樹木なども
人家のすきもなし見渡す其景色別に一世界なり
此所に探り入る人も奥深く覚えたり
さし入るにまかせて此辺まで入りぬべき所とがなし
行先もおぼつかなく岩窟を失んとするも恐ろしく
又余は程来りし舟とて思ふ事なかの洞の広
くなるあたりより先へはゆかず帰りてある人も多く足
をも踏み出ることなく此辺の人も奇なる事に覚え侍る

遠山も人家も別の世界にあるが如く男鹿山の内ら
又は秋田辺迄かるべしともおもはるゝなり然るに東角
山の深谷にまで見訓さるゝ由にておもはるゝは許潜仙
境までもあらんといふ我按じしは八月の頃なる故
八仙洞中へ入らずありしこそ残り多し

埋木

仙台の城より一里ばかりに名取川あり名取郡より流
るゝ故名取川と名付甚大河なり掛川に似たり
仙台より遠からず此名取川より出すを埋木と

木やうやく腐敗して青く黒く深く黒くなりたる
此杉木と見えし諸木は百年二百年のものにはあらずと新しく
岸根にありし杉松の埋れたるものの根にやと思はる
古き者はよみ置し埋木を一つもまる事あれど
この物あるところ多く探すに奥田玄播といへる
人あり家富て豪富にして且仁慈の人なれば
多くの金銭を出して其国の川ぞひを堀りて民を
賑し又は饑饉の年を渡しけれはいよいよ人民
の助けになることのありとおもして境界遠方ほど小は

新渠の碑など巍然として学人の知る所なり
此奥田氏名取川の堤を修めて田作の水難を防
ぎ時々川の底より地深く埋木出せし事あり予
親しく見たりけり此埋木は名取川の埋れ
木にしてことや甚だ小細工として出せる紙
入れるに実に名物として是のみならず数十
年を経ぬるものと見えて性は何れも甚だ堅く
色も黒く是を磨けば光沢ありて甚だ美し
のものなり又石炭海松などを拾ひて細工すなる

木理あざやかにして錦を見るやうにしてまことに
作人めづる埋木なり故しておもひける陸奥
くろき例の腰折れなどよみし通しけるにも
細工して箱などこしらへて小さき香合などに造り多く
年々大坂などへ送る青の年出して我家の宝
の一つとせりけるし西遊の時より伝へ来し技芸
まで物彼木を求むる者らも多くなりぬ

熊突

加賀越中の辺にて熊をとるに其熊の胆とりて

ゆゑ此辺通るにおゐると極上の熊胆を売む。余越中に在りし時立山禅境の山中の人に出会て熊をとる事を問ふに答て云猟者も多く雪猛かりし冬は雪降積る時は熊皆穴に入て住む。其時猟者ども薪木を多くもちきたりて熊の住る穴の中へ投入れば、熊出りて其薪をうしろの方へ押やる程に穴の奥の方は塞がりて其熊次第に穴の口の方へ出ぬれば穴の口つまりて熊穴の外へ出る時長さ三尺斗の鉾を以て月輪のあたりを撃

突くに熊突きとなりし時槍をとらんとしてすべく
り槍よは陰深く身を寄く猟者ハ始終手に槍被
ちかさ後取付ねく加勢の猟者を待つかたの猟
者きつよらるてまとうと似く熊の腹とうちて
殺すことし槍を突換ぬれば熊の常に
て槍の穂先を折るよ丈夫なる槍の刃ニ三四つ
よおまで砕くなれ是ハ猟者もはかり殺さるゝとそ
なり余もと吐てかくの猟の危さ傷をせんより
きかで鉄砲よてうちとめるかよし ハつに鉄砲ハ粮あ

やくしくの熊かいうるとよるこそ月輪とおもへ
ま付ると虫の人鉄砲の玉熊の牙をもふせぐといへ
とを忽ち喉かりてはなみ毅するハ猟者の
猪子取付み猪の姓ふ敢かりとあすの猟
を知ふて熊しもとくに身の熊の中に身の
うくはなのくま負ふるらハおぞ中かなるものゝ
長身ると身勇なりと猟する猟の漁者ら
此ふ勇の猟師も山よ雲あり盗賊ハ又利欲よ雲
あり其術にかよ雲あると另る

手蓋石

予は越前敦賀に遊びしは十月の初なりし
しが例ならず暖かにして北国なれども小春の
如くにて打續き天氣よかりければ此地の
人にいざなはれて長地まで人の手蓋石といふ所
見に行きぬ敦賀の町を出て西の方に出れば
まづ見ゆる松原あり是を一夜松原といふむかし
神功皇后の御時唐より賊船多く襲ひ來り
しに此海濱に此松一夜のうちに生出て如く旗と

簇多く松原に集まりし故敵の目には夥多軍
勢の旗差物と見えて驚き恐れ逃去りしと
いひ傳ふ誠に松の木ことに眞直の白砂の山
國の中に珍敷地なり夫より西十丁斗にて常宮
といふあり入海を隔て敦賀の町と向ひ合せて
まづ南むきにて地よくして風景殊に勝れたる所の
人の拝舞の宮は仲哀天皇と申奉る大社
なり往來の人なども此邊を經歴の附にも必此社へ詣
づる事なりとぞ遊行上人代々奉納の和哥

なりとぞ此宮のうしろに高祖山あり乳泉法
嶽へだゝりてみ入面さぶいが嶽と名付く此山に登る
こと二千八丁ありとなん石の上にある二千年斗
前すでに新田なる人も上りしがふしぎなる
のゝ己にありしがくを怪しみ見るにかくりしこのひ
傍へて数賀よりも人々登り見るに今ま
てまこ若狭度も狼煙の下にかくれし石のそのまゝ十
三間横二十間ばかり山の七八合目にも巳下に南に
およそまゐる甚大なる所の有り其間十五六間も隔

て此所を向ひ呼ば言葉の応ずる石とてありふしぎ
怪しみ由る人寄りて何となくなりて来る時に何となくその音
うしろふかゆりの石伊勢の国にも名ありて彼地にありて
鸚鵡石と名付く関東又は九州辺迄は聞も及べ
其日は天気も晴れ殊に親しき友人尾張のまで
杯酒の手すけもありて一しほの興をぞそへける
此辺より勝地多く此山の小松の緑色の濃かに
ふ西行芭蕉なども杖をとゞめてまた面白く見たる
しそこも扇子にまじはりてうたひなしくて

敬ふべくよろしく杜ともして顔容に顕はれ出

甲冑堂

奥州白石の城下より壱里半南に才川といふ駅あり此才川の町末に高福寺といふあり奥州筋近年の凶作にて此寺も大破に及び住持もなくて今は荒しかば僧も不住明寺となりて本尊のみにて仮寺へ安置しますや寺より左の方に路は少し深く谷に猿来のもみぢくいふ寺餘りありたるが中に又一ツの小堂あり俗に甲冑堂といふ堂の書付なき故に故将堂とあり大

さ纔に二間四方斗の小堂なり本尊とに右のごとくなるに此小堂の破損いふばかりもなくやうやく雨露の漏にあづかれる内に仏もなく只婦人の甲冑して長刀を持たる木像二ツを安置せりいかなる人の像ぞやと尋ぬるに佐藤次信忠信二人の妻なりとぞ甚義経鎌倉殿の気色をあしくうけ秀衡によりて陥しとて鎌倉へ趣き給ふ時佐藤庄司が子の次信忠信を供に出せり其後義経京都へ切登り平家を追落し一の谷八島などにて其ころの太功を

たゝかひて再度奥州へ来りたゝかひし時ちからつき
疵ひて出るうしろ亀井片岡なども落失けるまゝ
過ゆせしは次信は八嶋にて能登守教経の矢先にかゝり
忠信は京都にて義経の為に命をおとし兄弟二人
とも他国の土となりしく我息のくるしさを母なる人
なげきかなしく歎きて無事に帰り来る人を見るにつけ
てせめては一人なりとも此人のごとく帰りなばなど
涙流しぬると兄弟の妻女其母の心根を推察し我が
夫の甲冑をきせし出立をまねしけるに生
ましめし兄弟凱陣せしと其体をまなび老母にみせ
せ其心をなぐさめしかば其ほどの人も二人の婦
人の孝心あつきに感じ其容を木像に刻
みて祠しまつりしく嗣守兄弟の人は古今ならびなき
忠臣たれば忠義武勇ならぶ其人まれなるに二人の婦
人又希代の孝女にて夫婦忠孝の美を尽くしも世
に語りつたへしまで今の世の物語にて見物感じ
まるにそぶ語りに落涙せざる人の類ひもな
るべき孝婦の像かくあるを見るに小堂の雨風

そこに隠れなく彩色も落失せ僧だに守らで
香花を供ずる人も無く年月を荒果ゆきぬれば
其跡ともなくなりもなく先祖の事をも詳に尋ぬ
る人もなくなりなんを惜しみてありしさまをとりしるして一誌に
の三宝をこれに供ずる人も無きは世の人の忠孝の感応
る人の多くあれかしやとありし事を見るに一しるしの為
安土陪従ねがふ

東遊記巻之一終